

症 例

上顎第3大臼歯と過剰歯との融合の1例

船越正夫 黒田政文* 板垣光信*

岩手医科大学歯学部歯科薬理学講座

(主任: 伊藤忠信教授)

岩手医科大学歯学部口腔病理学講座*

(主任: 鈴木鍾美教授)

〔受付: 1988年3月11日〕

抄録: 24歳の女性の上顎左側にみられた第3大臼歯と過剰歯の融合した1例を報告した。第3大臼歯と過剰歯とは象牙質とセメント質にて結合していたが、エナメル質の連続性はみとめられなかった。過剰歯はその出現部位と形態から臼旁歯と考えられた。

Key words : fused third molar, supernumerary tooth, paramolar, fusion.

はじめに

歯の融合とは2個または数個の歯が象牙質およびエナメル質,あるいは象牙質とセメント質によって結合することをいう¹⁾。さらに,歯の融合は正常歯相互間のもの,過剰歯相互間のもの,正常歯と過剰歯間のものなどに分類されている。これらのうち,正常歯と過剰歯とが融合することは非常に少ないといわれている。今回,著者らは第3大臼歯と過剰歯との融合した1例を経験したので,その形態所見を報告するとともに,その成り立ちと鑑別診断について若干の考察を試みた。

症 例

患者は24歳の女性で,上顎左側第2大臼歯の歯冠修復を希望して来院した。上顎左側第2大臼歯の遠心には歯冠周囲炎を伴った半埋伏状態

の第3大臼歯がみられた。そこで,第2大臼歯の歯冠修復に先立って,この半埋伏状態の第3大臼歯を抜歯した。

第3大臼歯の歯冠形態は第2大臼歯に類似していたが,咬頭の配列は不規則であった。歯根は比較的太い遠心根と細い近心根の2根からなっていたが,根分岐部は根尖側に位置していた。また,近・遠心根ともわずかに遠心側に傾斜していた。この第3大臼歯の歯根頬側面のやや近心側に,小臼歯の歯冠大の大きさで,類球形を呈する歯牙様硬組織塊が認められた(Fig.1)。この歯牙様硬組織塊の表面は滑沢なエナメル質様を呈し,第3大臼歯の歯根とは強固に結合していた。また,一部には垂直方向に不規則に走る浅い裂溝がみられた(Fig.1a)。軟X線像では,第3大臼歯の歯根と結合していた歯牙様硬組織塊の表層のエナメル質も,内層の象牙質も同様に高度の不透過性を呈した(Fig.1d)。

A case of fused tooth consisted of the maxillary third molar and supernumerary tooth.

Masao FUNAKOSHI, Masafumi KURODA* and Mitsunobu ITAGAKI*.

(Departments of Pharmacology and Oral Pathology*, School of Dentistry, Iwate Medical University, Morioka 〒020)

岩手県盛岡市中央通1丁目3-27(〒020)

Dent. J. Iwate Med. Univ. 13 : 173-176, 1988

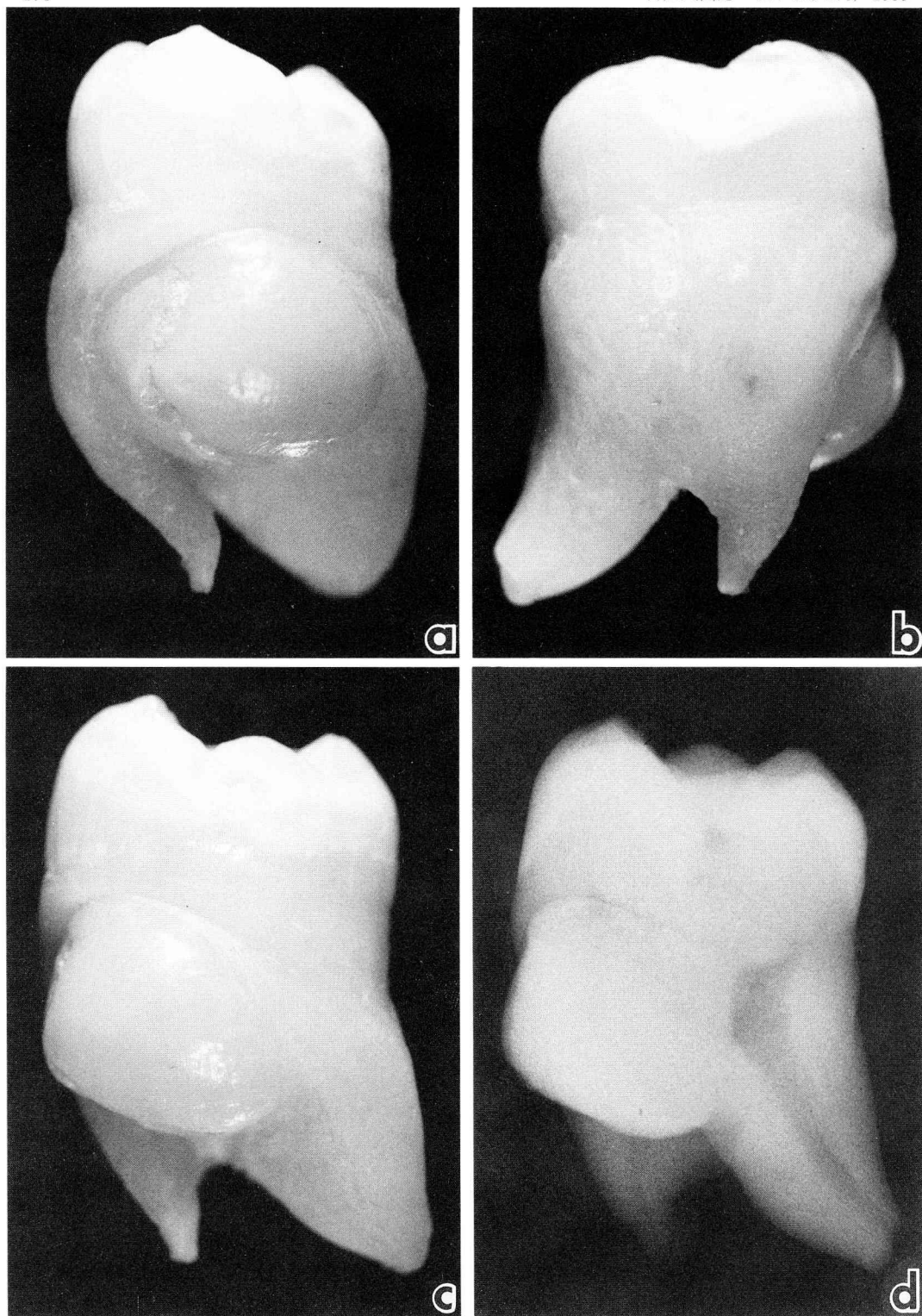


Fig.1 Macroscopic and roentgenographic views of the left maxillary third molar and supernumerary tooth. a, mesio Buccal view ; b, lingual view ; c, buccal view ; d, roentgenographic view.

第3大臼歯ならびにそれに結合していた歯牙様硬組織塊を非脱灰研磨標本で観察すると、第3大臼歯の歯根に結合していた歯牙様硬組織塊は明らかなエナメル質と象牙質の構造を有し、歯としての形態を呈しているので、融合歯と判断された(Fig.2)。なお、それぞれのエナメル質の連続性は認められなかった。

考 察

大臼歯部にみられる過剰歯は、その萌出部位によって臼後歯と臼旁歯とにわけられている²⁾。臼後歯は第3大臼歯の遠心に萌出するもので、第4大臼歯とも呼ばれている。また、臼旁歯は大臼歯部の頰側に萌出する過剰歯である。従来、臼後歯と臼旁歯とは発生が異なると考えられていた。しかし、臼後歯と臼旁歯との間に形態的な違いはみられないことから、最近では、これら両者は相対的な萌出部位の主観的判定による名称であって、発生学的にはいずれも同一のも

のであろうと考える傾向にある³⁾。本症例において、上顎左側第3大臼歯に融合した過剰歯はその出現部位から臼旁歯ともいえよう。一般に臼旁歯といわれている過剰歯の多くは第2大臼歯部にみられ、第3大臼歯部に出現することはまれの様であり、北村と西川³⁾は上顎大臼歯部にみられた自験例の臼旁歯20歯のうち、第2大臼歯のものが19歯であったのに対して、第3大臼歯のものはわずかに1例にすぎなかったと報告している。また、第3大臼歯と臼後歯との融合あるいは癒着例は本邦では現在までに下顎で20例前後⁴⁾、上顎で10例前後が記載されている³⁾が、今回報告したような第3大臼歯と臼旁歯との融合あるいは癒着例の発生頻度については明らかにされていない。

一般に過剰歯は、第3歯堤や正常歯胚の分裂由来すると考えられている⁵⁾。また、融合歯の成り立ちとしては、正常歯胚の不完全分裂や2個の歯胚の融合が考えられている^{1,5)}。しかし

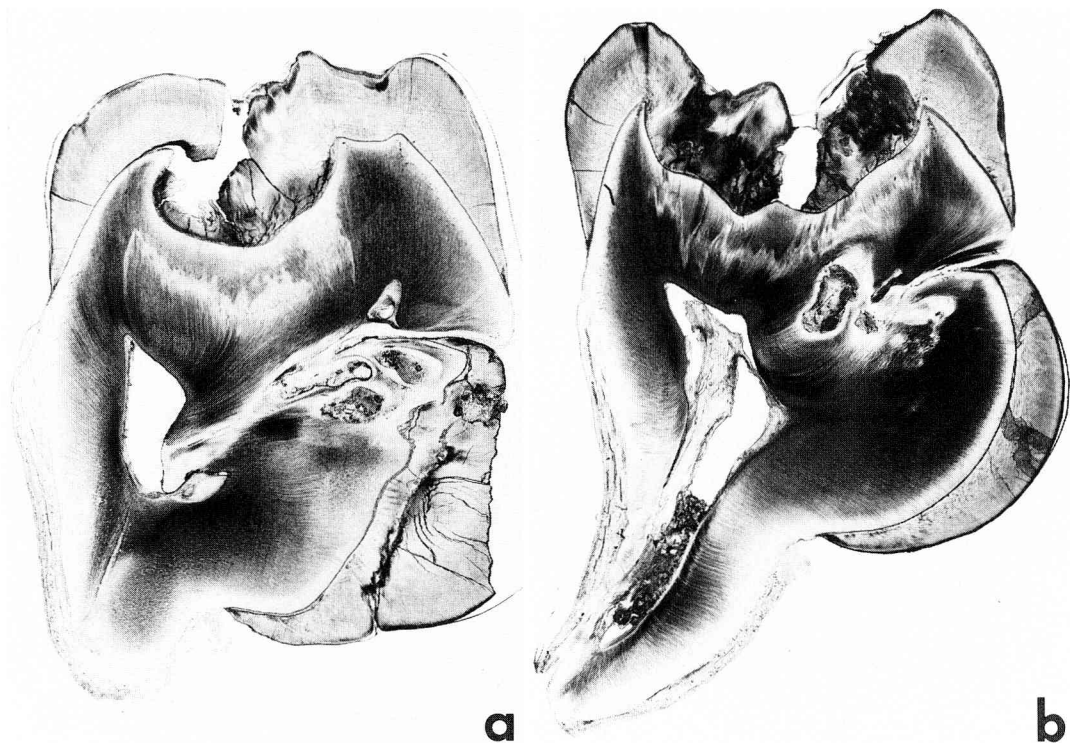


Fig.2 Undecalcified ground sections of the fused tooth consisting of third molar and supernumerary tooth.

ながら、本症例における第3大臼歯と臼旁歯との融合がいかんにして生じたかについては明らかでない。なお、正常歯と過剰歯との融合を双生歯とも呼ぶこともあるが、双生歯という名称は通常前歯部に用いられる傾向にある。また、北村と西川³⁾は融合した正常歯と過剰歯との形態が著しく異なった場合には双生歯という名称は適さないと述べている。

最後に、今回報告した第3大臼歯と臼旁歯との融合例は第3大臼歯の臼旁結節(またはプロトスティリッド)やエナメル滴との鑑別が必要である。臼旁結節は歯冠部にみられ、エナメル質は大臼歯と連続性を示すのが特徴である。しかしながら、本症例の非脱灰研磨標本では、両者のエナメル質の連続性は認められなかった。一方、エナメル滴は歯根部における異所性の限

局性エナメル質形成であるのが特徴である⁵⁾。これには、種々の大きさのものがあるが、歯としての外見を呈することはない。本症例では、肉眼的にエナメル質表層の咬合面溝に相当すると思われる浅い裂溝が認められたことから、エナメル滴でないと考えられた。

ま と め

本症例の第3大臼歯と過剰歯とは象牙質とセメント質にて結合していたが、エナメル質の連続性は認められなかった。過剰歯はその出現部位と形態から臼旁歯と考えられた。

本稿を御校閲下さった岩手医科大学歯学部歯科薬理学講座伊藤忠信教授、同口腔病理学講座鈴木鍾美教授に感謝いたします。

Abstract: A case of a fused tooth, the maxillary third molar and the supernumerary tooth, found in a 24-year-old female patient was reported. Macroscopically, the supernumerary tooth was fused to the mesiobuccal root surface of the maxillary third molar, and a shallow groove was noted on the crown of the supernumerary tooth. The histological finding of undecalcified ground sections revealed that the maxillary third molar and the supernumerary tooth were fused with dentin and cementum. It was thought that the supernumerary tooth was paramolar by its anatomical features, however, fusion between the third molar and paramolar is rare.

文 献

- 1) 石川悟朗, 秋吉正豊: 口腔病理学, 改訂版永末書店, 京都, 13-17頁, 1978.
- 2) Bolk. L.: Supernumerary teeth in the molar region in man. Dent. Cosmos. 56: 154-167, 1914.
- 3) 北村博則, 西川純雄: いわゆる第四大臼歯の発

現部位と形態: 智歯の重複と癒合の可能性, 神奈川歯学, 19: 407-417, 1985.

- 4) 戸塚盛雄, 福田容子, 小川光一, 武田泰典, 大西政俊: 下顎第3大臼歯と第4大臼歯の融合の1例, 岩医大歯誌, 11: 37-41, 1986.
- 5) 石川悟朗, 伊藤秀夫, 神沢康夫, 中沢 勇編: 歯学大事典, 永末書店, 京都, 59, 167頁, 1980.